権現(日吉)神社のはなし

むかしこの村の長の夢枕に須佐之男命が現れ、「わが社殿は七尾七谷ある山の頂へ造営すべし。」とお告げがありました。翌日夢のお告げの場所を探してみたところ、今の権現山が七尾七谷あることがわかり、村人が話し合い社殿を修造したということです。

とうの岡のはなし

むかし宮島の社殿を造営することになりました。河内村のとうの岡の材木を切って出し、岡の上に材木をそろえていました。ここは安心じゃと村人が酒を酌み交わし寝たところ、大雨と大風がその晩にありました。とうの岡にいっぱい積んでいた材木は夜の間に流れ出し、五日市のつくねが島に当たって、それから西に向って流れ宮島の磯の岡に流れ着いたということです。その材木を使って、社殿を造営したと伝えられています。

伝説の地に建てられた石碑

切腹岩(山根城)のはなし

むかし河内村の山根城に武将がいました。ある夜石内山の方から松明を持って城に多数の敵が攻め寄せてきました。武将は「わたしは敵に討たれたくないので自刃する。死んだ時には、墓をこの前の大きな田の真中へ立ててくれえ。」と言い残して腹を切って果てられました。

その後田を作るのに、田の真中に墓があっては何かと困るので、村人みんなで小川の端まで移動させました。それから人々は、その小川で洗濯をしては、その石を洗濯物の置き場にするようになりました。それを見ていたある村人は「これは偉い人の墓だから、こうして置かれぬ。」と思い、みんなで山の麓まで移動させたということです。

小林地蔵尊のはなし

明和年間(１７６４年～１７７２年)に大洪水がありましたが、才蔵という人が出水を近所に知らせ自宅に帰る途中に、水に流され行方不明となりました。その後近所の人が、才蔵さんの冥福を祈るために、地蔵尊を立てられたとのことです。

当地の風習として、結婚の時に村人たちは、近郷の石地蔵を婚家の嫁先に持ち運びました。お地蔵様を運ぶ時は、必ず水をお供えしていました。それをしないとお地蔵様が川に落ちて、運べなくなると伝えられています。

善人善六のはなし

むかし善六という者が成人したころ、藩の財政が悪化しておりました。藩では田んぼの測り直しをし、財政を立て直すことになりました。測量が佐伯郡に明日から入るという時に、善六は農民を集め一揆を起こしました。

善六は捕らえられ、処刑されることとなりました。処刑の時刻になり役人は善六に向って「善六、悪いことをしましたと謝るならば、許してつかわそう。」と言いました。すると善六は「もし自分が謝ると言えば、土地の百姓共は残らず死刑を待つばかりである。度せたりといえどもこの善六生命を惜しむものではござらぬ。」と言い返しました。さっと右の腕を役人の前に差し伸ばし袖をまくり「この善六には謝るという筋は一本もござらぬ。」と両眼をカッとひんむいて役人をにらみつけました。役人は是非を無しとして、善六の首を斬ったということです。

あっと驚く浪人どものはなし

むかし春とはまだ名のみで荒ヶ山には雪が残っていて、吹く風も冷たい頃の朝のことでした。若い春が実家の嫁姫枕いのおはずを背負って、峠の頂を少し過ぎようとしたところ、浪人どもが焚き火を囲んで暖を取っていました。

若い春がこの一団の側を通り過ぎようとした時、一人の浪人が声をかけおはずをくれるように言いました。仕方なく若い春は、浪人達に一つずつ配りましたが、もっとよこすようにと言って、若い春に一人の浪人が殴り掛りました。ところが、その浪人は若い春の袖にも触れることなく、谷に向って投げ飛ばされました。驚いた浪人どもは一斉に若い春をめがけて殺到しましたが、誰一人としてこの若い春に触ることなく次々と投げ飛ばされてしまいました。若い春は恐々と巻物についた埃を払い、荷物をもって消えていったそうです。この若い春が使った技が、難波一貫流の技と言われています。

八幡川とくらし

1889年（明治22年）に下河内村・上河内村・下小深川村・上小深川村の旧4ケ村が合併して河内村ができました。1955年（昭和30年）に町村合併により五日市町となり、1985年（昭和60年）に広島市と合併し、佐伯区となりました。

河内地区の世帯数と人口

年	世帯数	人口	事　項
1889年（明治22年）	421世帯	2,010人	河内村の誕生
1955年（昭和30年）	413世帯	1,839人	5町村が合併し五日市町誕生
1985年（昭和60年）	956世帯	3,189人	広島市と合併

河内地区の産業

河内地区の主な産業は農業と林業で1911年（明治44年）に殖産興業に努力し好成績を納めたことから、広島県と国から表彰を受けました。記録によると、宝暦5年・明和8年・文政12年・嘉永3年・明治5年・昭和3年・昭和20年など、多くの災害を体験しています。税は土地にかけられるために、災害などで米が収穫できなくても納めなければなりませんでした。ところが河内地区には、税の免除を受けたことを記した石碑が、下河内の殿畑に残っていました。しかし、1999年（平成11年）6月29日の災害で石碑は流失し、現在は所在不明となっています。

下河内免税の碑

碑文には、

文政七年六月申廿八日
此所高壱斗壱升七合
流ニ付升高否不事

（1825年記）と書かれていました。

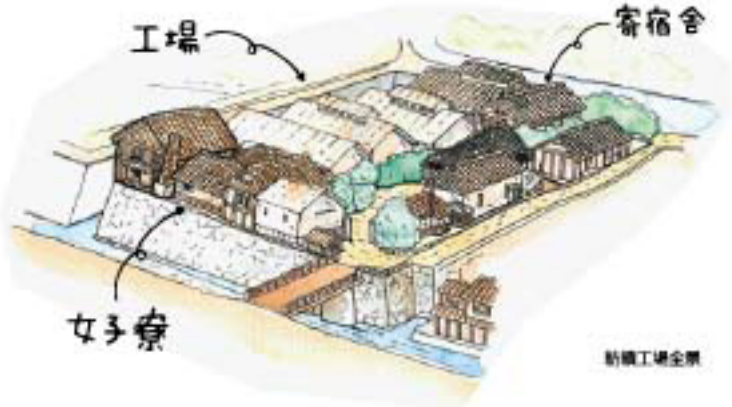
1911年（明治44年）の記録では、農業:360世帯、工業:30世帯、商業:25世帯、その他:10世帯で、合計425世帯となっていました。

江戸時代までは農業中心でした。明治時代になって国の政策により、下小深川に広島綿糸紡績工場が造られました。この工場は1883年（明治16年）7月2日に創業開始し、工場敷地約1haで機械はイギリス製の3,000錘紡機で、45馬力のタービン水車を使用し、当時としては最新鋭のものでした。

工場の建設には毎日約300人が働いたと言うことで、特に石垣工事は立派なもので現在もその一部が残っています。当時はセメントのない時代なので石垣はしっくいで固められていました。

広島綿糸紡績工場は、閉鎖されるまで経営者や会社名が幾度も変わっています。

工場の立地により、地域のようすは一変しました。山陽鉄道（現JR山陽本線）の五日市駅が設置されたのも、この工場があったからだということです。



紡績工場全景

紡績工場全景（昭和初期頃の様子）